

一
般
の
部

最優秀賞

私の「焼津にて」

静岡県静岡市 南 民

二〇〇七年七月、焼津の旧港が望める小さなマンションを購入した。特別に海が好きという訳ではない。実は、近くに八雲橋があり、小泉八雲の焼津での滞在先である山口乙吉の旧家が望めたのが主な理由である。静岡市内から焼津に引っ越してほぼ毎日、八雲の旧家に立ち寄り、裏口の川沿いに沿って港に出て、八雲橋を渡って家に戻ってくるのを日常の習わしとしていた。

当時、私は仕事場での人間関係のトラブルが原因で酷い鬱の状態であった。日本中に心を休める場所がなかった。というのは、私はアジア出身の外国人である。そもそも日本はどこも異郷である。ふと焼津を思いついた。八雲の「焼津にて」に縁起を担ぐような心境になっていた。

小泉八雲を知ったのは、日本に留学して日本研究を専攻にしてからのことであった。とくに『怪談』が好きで英文と日本語訳を比較しながら読んでいた。日本文化論も面白い。しかし、八雲が好きになったのは作品だけではない。明治期にお雇い外国人として来日し、日本研究に大きな功績を残した小泉八雲は、日本文化を専門にする私のような外国人が目指す憧れの研究者でもあった。心理的に重ね合わせられるところも強くあった。博士課程を終えてしばらく早稲田大学に出講したが、通勤はいつも都電荒川線の早稲田行きを利用した。時間がある度に途中の雑司ヶ谷駅に降り、八雲のお墓に参拝したりした。入り口の近くにある小奇麗な墓碑の前で、八雲の一生を思い、またそのような業績を目指そうと誓

った。しかし、静岡市に赴任して間もなく人間関係のトラブルに巻き込まれて鬱になり、心を休める場所を求め、八雲を追うかのように、焼津の港に逃げ込んだ。毎日八雲橋を渡った。山口乙吉を求めた。しかし、山口乙吉には出会えず、鬱も治まらない。

小泉八雲の日本文化論を読むと、日本に対する八雲の愛情が滲んでいる。日本文化の様々な側面と日本人の美意識が賞賛されている。明治期の先駆的な日本文化論で、それは昭和期のブルーノ・タウトの日本文化論にも影響しており、日本文化論の一種の聖典（カノン）にもなっている。以前の私はそれに共鳴していたが、トラブルで鬱になってからはそのような思いをしなくなった。私は、明治期に欧米から来日したお雇い外国人教師のような優越的な存在でもなく、ほぼ国賓の待遇で来日したブルーノ・タウトのような著名な芸術家でもない。アジアから来日した、いわゆる「外人」である。いわば現代版の難民で出稼ぎ労働者に過ぎない。立場が全く違うのである。

ブルーノ・タウトの日本文化論は、八雲の影響が強く、「幽玄」「さび」「侘び」等の古い日本美を賞賛している。それに坂口安吾は『日本文化私論』の冒頭で、「僕は日本の古代文化に就て殆んど知識を持っていない」といささか反抗的な態度で、「タウトによれば日本に於ける最も俗悪な都市だという新潟市にぼくは生れ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオンサインを僕は愛す」と豪語する。さらに「タウトは日本を発見しなければならなかった」が、「われわれ」は「現に日本人」であり、「すくなくとも僕は日本を（発見）する必要だけはなかったのだ」と開き直る。じつは私も同じ心境になっていた。坂口安吾の「新潟市」や「日本」を「アジア」に置き換えれば、欧米の知識人とは違う私自身の視線が自ずと現れる。様々な歴史的な屈折がある。その屈折を紛らわすために坂口安吾のようにネオン街を飲み歩くことにした。

しかし、坂口安吾のいう東京銀座のネオンに比べれば焼津の夜は寂しい。駅南にある商店街はシャツ

ター通りになって夜は暗く、「小泉八雲像」のレリーフのすぐ側にある二、三の低いビルの前では常時三、四人の若い男が客を引いている。キャバクラとクラブの従業員たちである。駅周辺にはフィリピンクラブが四、五軒点在しており、多国籍の女性達が抑揚のあやしい日本語を放っている。そこに日本人や入れ墨の多い船乗りが顔を出す。それが焼津のネオン街のほぼ全容である。

焼津滞在二年目で、私は八雲橋を渡る日課の散歩を止めて駅前のネオン街（？）に進出した。客引きの男達に誘われるがままキャバクラやスナックに通い、フィリピンクラブにも頻繁に顔を出した。ネオンの乏しい駅南を、坂口安吾の東京銀座のように徘徊した。キャバクラの客引き男は私の乙吉であり、アルコールは大船である。飲み屋には様々に傷ついた日本人や外国人女性が集まっており、同様の男達がそこを通っている。ともに生きる連帯感のようなものが微かに共有される。酔いつぶれて家に戻る時は、破船がようやく港に戻ってきたような感覚になる。それで鬱が少し和らぐ。一〇〇年前の小泉八雲とは違う、今の日本を「外人」として生きる私の「焼津にて」がそこにある。時代と人間は常に変わるものである。

幸いに鬱症状もようやく落ち着き、今夏、私は後一月余りで、少々の希望を抱きながら焼津を離れることになる。しかし、暗いネオン街で出会った日本人のキャバクラ嬢やスナック嬢をはじめ、フィリピン人、ブラジル人、ハンガリー人の女給、多国籍の船乗りたち、また客引きの現代版の乙吉と別れるのはいささかさびしい。みなが傷ついていたが、もう彼・彼女らに二度と出会うことはないだろう。しかし、一瞬たりとも人生とともに交わったことで、お互いに少しぐらいの希望はまた生まれるだろう。根拠はないが、焼津にいらるとなるとなくそう思われる。各々の「焼津にて」があるだろうと。